

【連載】

5つの向かい風を超えて (その6)

間瀬俊明* (昭42年卒 デジタルプロセス(株))

5つの風をどう乗り越え、どう変えるか

以下に、現在のモデルをどう乗り越え、どう変えることを前提に目標を定めるか考えてみたいと思います(図7)。

(1) オープンから多様化に向かう

これまでクローズドからオープンへ、ローカルからグローバルへの道を辿ってきましたが、オープン化とグローバル化の影響は人間世界にとどまりません。10月に名古屋で生物の多様性をどう守っていくかという世界会議 COP10 が開かれました。人間による生態系の破壊でその一部でも欠ければ、全体のバランスが崩れて連鎖的に多くの生きものに悪影響を及ぼします。そのことの重大さを世界で共有し、開発や気候

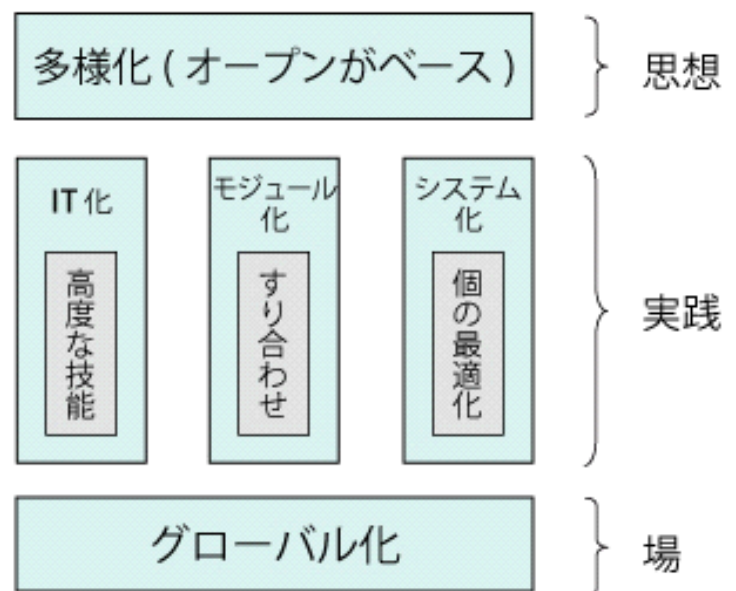


図7 目標の定め方

変動などで急速に減っている種や生態系を守るための対策について話し合うことになっています。この動きから分かるように、地球や生物にとって、「豊かさ」の重要な要素の一つは「多様性」にあります。人間の世界も同様で、クローズドからオープンへの変化は、文明の画一化と多様な文化の消滅をもたらすことを生態系が教えています。これからはオープンを維持しつつ多様性をどう守るかを追求する時代に入っていくと予測されます。その課題にどう応え解決するか、日本が、あるいは日本の製造業が果たすべき役割はとても大きいと思います。

(2) グローカル化を目指して

1990年以降の、発展途上国も巻き込んだ新たなグローバル化時代に大きく取り残

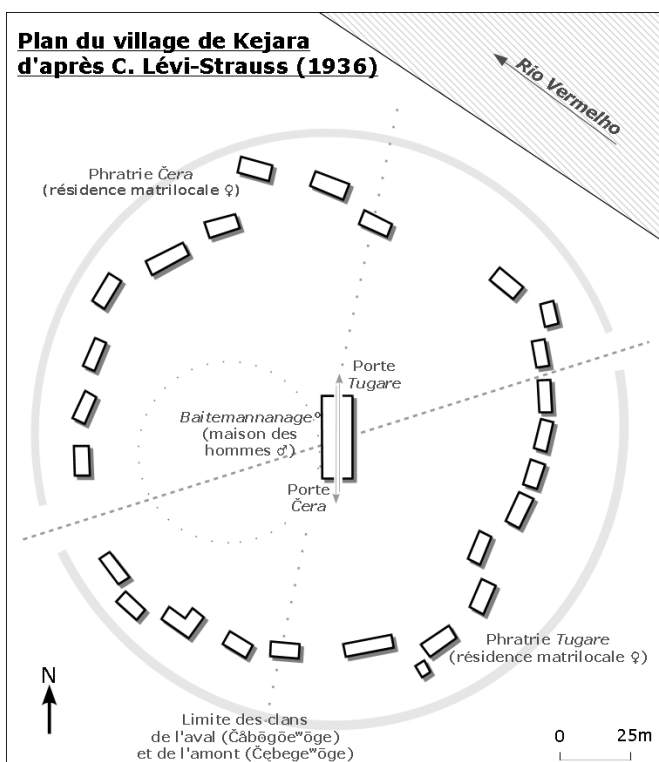
された日本ですが、一方で今の延長線上でのグローバル化だけでは決してうまくいかないことも徐々に明らかになってきました。 今後は、多少言い古された感もありますが、ローカルでもグローバルでもない、'Think Global Act Local'、すなわちグローバルな枠組みで発想し、場としてはそれぞれの地域の考えを大切にする、いわゆる「グローカル化」の優劣が市場競争の決め手の一つになるように思います。 もちろん、新しい追い風にするために、「オープンを維持しつつ多様性を守る」という考えとセットで目指さねばなりません。

(3) IT化、モジュール化、システム化の徹底とコンテンツに日本的強みを

次に、実践として掲げたIT化、モジュール化、システム化についてどう取り組むべきか考えてみたいと思います。 この三者は前回、システム化を中核にして密接な関係にあると述べました。 これまで分析した欧米の強みを、まずは素直にそして最大限の努力を払って取り入れ、競争優位を獲得します。 そしてその上で、それぞれの項目ごとに、1990年以前の日本の強みを内挿することで更に差別化を図ります。 すなわち(図7)にあるように、IT化にあたっては強みであった高い技能の形式知化(例えばナレッジの体系化とニューロネットの活用など)にチャレンジし、ITシステムに埋め込みます。 モジュール化については、そのインターフェースを確保したうえで、同様に得意技であった設計段階でのすり合わせを可能な限り行い、モジュール内に強みとして隠ぺいします。 そして最も重要なシステム化については、システム思考を徹底したうえで、構成する要素個々の最適化を追求します。 そしてその場合でも要素自体より要素の相互関係のほうが常に重要であるというシステム化の本質を見失ってはなりません。

日本の果たすべき役割

人間が地球に対し修復ができない傷跡を残すいかなる権利も与えられていない、ということをも日本の文明が前提にしてきたことは、自然との共生のこころを持つ「八百万(やおよろず)の神」の思想や、かけがえのない地球資源に対する「もったいない」という言葉からも推し



『悲しき熱帯』(原題: *Tristes tropiques*) は1955年にフランスで刊行された文化人類学者 Claude Lévi-Strauss の著書である。1930年代のブラジルでの旅の記録をまとめた紀行文だが、その文章にちりばめられた思想、特に優れた未開社会の分析と、ヨーロッパ中心主義に対する批判により後に本書はセンセーショナルな評価を受け、文化人類学、また構造主義におけるバイブルのひとつとなる。また人文科学にも大きな影響を与えた。Wikipedia

量れます。 もったいないという言葉自身は、アフリカのワンガリ・マータイさんがその価値を地球に広げるべきと語ったことで有名になりましたが、日本の提案する地球システムとはある意味、「もったいないシステム」という言葉で言い表してもよいかもしれません。そして日本のもの作りが再び評価されるようになるのは、この「もったいないシステム」が世界中で広く受け入れられた時であろうと思います。

『世界は人間なしにはじまったし、人間なしに終わるだろう』という、レヴィ＝ストロースの言葉を改めて考え、生物でもある人類が多様性や多様な文化を残しつつ、豊かな文明を享受する世界の構築に向け、日本全体が、とりわけ日本の製造業が先頭をきって走ることができれば、失われた20年から再び蘇ることができるのではないのでしょうか。

DIPRO ニュース 2010年8月号～10月号に掲載

(おわり)

—— 京機短信への寄稿、 宜しくお願い申し上げます ——

【要領】

宛先は京機会の e-mail : jimukyoku@keikikai.jp です。

原稿は、割付を考慮することなく、適当に書いてください。MSワードで書いて頂いても結構ですし、テキストファイルと図や写真を別のファイルとして送って頂いても結構です。割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。

宜しくお願い致します。

3 回生を終えるにあたり

機械システム学コース 3 回生 栗山頌平

「この世において、劃期的なことをするためには、...第一に、頭のいいこと、第二に、大きな遺産をうけつぐことだ。」(エッカーマン『ゲーテとの対話』)

何かを受け継ぐ、背負うということ

現代は就職の超氷河期だと言われている。 大手志向、安定を求めて早くから就活に奮闘する学生。 就活のために授業に出られないとか、十分に試験勉強ができないという話も聞く。 むろん、勉学に励むことだけが大事だというわけではない。 しかし、漠然とした不安がある。 大学全入時代といわれる現代に大学にやってきた我々は、大学へ来て一体何をやったのか。 そして、我々は何を背負っているのか。これから何をしようというのか。

小澤征爾が若き日に、日の丸旗付きのスクーター片手にフェリーに乗り込み、はるばるヨーロッパまで指揮者修行に行った話を思い起こす(小澤征爾『ボクの音楽武者修行』)。 これは真の巨匠たちが生まれた時代の話だけれども、現代はともかくにも、グローバル化して、昔よりもずっと自由になって、就職の幅も広がり、何事もやり易くなった時代だ。 しかし、これは果たして、自由なのか、不自由なのか。

昨夏にスイスとイギリスに旅行した。 まずはスイスのベルン。 石造りの商店街の一角に、アインシュタインが1905年あたりを過ごしたという家があった。 彼がそこで書いた論文のひとつが、『運動する物体の電気力学について』。 特殊相対性理論を述べたものだ。 こんな原題だった。 彼は従来の電磁気学に「裂け目」を見出したのだ。 そして、アインシュタインの生年はマクスウェルの没年である(1879年)。



ベルン近郊トゥーンのトゥーン城

続いて、イギリスではケンブリッジ大学にも行った。 美しく広がる芝生に、中世そのままの荘厳な建物。 ほとんど修道院のようだった。 学生は学問に仕える僧侶であったか。 大学内の古い図書館を見学できた。 階段を昇っていくと、壁に掛けられた肖像画に次々と出会う。 図書館の広々とした空間には、背表紙が

すっかり黒くなった大きな本が書架にずっしりと並んでいる。そしてその各々の書架の上からは、偉人たちの白い胸像が我々を見下ろしている。ニュートンがフックと交わした手紙、ヴィトゲンシュタインの手帳の展示を見た。

それから、ロンドンの夏の風物詩、BBC プロムス音楽祭に行った。最終日の「ラストナイト・コンサート」は毎年恒例のお祭り騒ぎだ（この模様は先日NHK-BSでも放映された）。何年も前にテレビでこの「ラストナイト」を見たとき、世界にはこんなに楽しいコンサートがあるのだ、いつか行ってやりたいなと思った。大きなロイヤルアルバートホールを埋め尽くした聴衆が、ホールいっぱいに「ラストナイト」伝統の曲を大合唱する。ルール・ブリタニア、エルサレム、威風堂々、イギリス国歌、そして、最後に聴衆全員で隣の人同士手を繋ぎ合って歌う蛍の光…。まったく忘れることのできない感動だ。ホールの当日券売り場に座っていたときに見た景色のことをよく覚えている。それは、気難しいロンドンの天気が見せた、一瞬の青空だった。



「ラストナイト」天井立ち見席よりステージを望む

野次馬話 第17話 「ジェンダーフリー」

S43 卒 遠藤照男

「男女」という言葉を「女男」に変える提言をする、女兒に愛らしい名前をつけず男児に雄大な名前をつけぬ運動をする、運動会の競技を男女混合にする、雛祭りや鯉のぼりで遊ぶ男女児差を排除する、「桃太郎」ではなく「桃子」の劇を演じさせる、児童の段階からセックスと避妊の授業を行う。これらは全て新聞雑誌に掲載されたものである。良妻賢母なんてとんでもない。夫唱婦随なんて聞いたら目を回す。

「ジェンダーフリー」って何だろう。吊るし上げに会うといけないので、余り深く追求することは避けるが、市井の男女にとっては、無理やりに男女の違いを無視し、差別につながるものとして「らしさ」を否定する運動にしか見えない。「男と女は同等であっても、同質ではあり得ない。」と言うのが、ジェンダーの本来のあり方ではないのか。

そもそも、ジェンダー（Gender）とは、後天的・社会的・文化的性別のことを言い、セックス（Sex）が先天的・生物学的な性別を示すことと区別される。しかし、実際には「どこまでがジェンダーでどこまでがセックスなのか、明確な境界はつけ難い。それが、「ジェンダーフリー」運動となってくると、「社会的文化的性差から自由になる」運動、換言すれば、「社会的文化的性差であるジェンダーに拘束されず、個々人がその資質に基づいて果たすべき役割を、自己決定出来るようにしていく。」運動となるらしい。性別が性差に置き変っている。日本の運動は英語でいう「ジェンダー・イクオリティ」になるうか。

「ジェンダーフリー」運動を進める団体にも幅があり、様々な考え方があるようで、「性差を否定し、男女の相違を認めない」考えもあるようだが、完全に男女の区別を解体すると、女性を対象とする保護・優遇措置まで否定し、マイナス効果を招くことになる。

「京機会九州支部 H23年春の行事」のご案内

京機会九州支部では本年の春の行事を4月23日(土)～24日(日)に鹿児島県の種子島で開催します。種子島まで行くなら屋久島もという方のためにオプションとして屋久島観光も計画しました。ご家族の皆様や本部、他支部の皆様のご参加も大歓迎です。

日時：平成23年4月23日(土)～24日(日)

場所：鹿児島県 種子島、屋久島(オプション)

第一部：種子島観光

4/23(土) 15:00～17:00 種子島鉄砲館、千座の岩屋等

航空機で到着の場合：JAC3765 鹿児島 11:30 発 種子島 12:10 着

高速艇で到着の場合：トッピー 85 鹿児島 13:00 発 種子島 14:35 着

第二部：懇親会 門倉亭南荘 〒891-3701 鹿児島県熊毛郡南種子島町中之上 2237-2

TEL：0997-26-1221 <http://www3.ocn.ne.jp/~minamiso/>

4/23(土) 18:30～20:30 会費：宿泊費、懇親会費、朝食を含めて約10,000.-/人

第三部：見学会 JAXA宇宙センター

http://www.jaxa.jp/about/centers/tnsc/index_j.html

4/24(日) 09:00～12:00 宇宙センター概要、宇宙科学技術館、大型ロケット射点

航空機で帰る場合：JAC3770 種子島 15:45 発 鹿児島 16:20 着

JAC3774 種子島 18:00 発 鹿児島 18:35 着

高速艇で帰る場合：トッピー 85 種子島 15:30 発 鹿児島 17:05 着

ロケット 105 種子島 17:00 発 鹿児島 18:35 着

オプション参加の場合：高速艇 トッピー 88 種子島 17:30 発 屋久島 18:20 着



第四部<オプション>：屋久島観光

<オプション> 屋久島1泊

4/24(日) 高速艇 トッピー 88 種子島 17:30 発 屋久島(安房) 18:20 着

宿泊 ホテル屋久島山荘 〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町安房 2364-35

TEL：0997-46-2011 <http://www17.ocn.ne.jp/~yakusima/hotel/index.html>

1泊2食 約10,000.-円/人

4/25(月) 09:00 ~ 12:00 屋久島観光 屋久杉ランド等

航空機で帰る場合： JAC3748 屋久島 13:50 発 鹿児島 14:25 着

JAC3750 屋久島 15:15 発 鹿児島 15:45 着

高速艇で帰る場合： トッピー 84 屋久島(安房) 13:30 発 鹿児島 15:30 着

< オプション > 屋久島2泊

4/24(日) 高速艇 トッピー 88 種子島 17:30 発 屋久島(安房) 18:20 着

宿泊 オプション と同じ ホテル屋久島山荘 朝食は弁当。

4/25(月) 05:00 ~ 18:00 屋久島観光 縄文杉往復(片道約5時間、健脚向き)

宿泊 オプション と同じ ホテル屋久島山荘

4/26(火) 09:00 ~ 12:00 屋久島観光 千尋の滝、猿川ガジュマル等

航空機で帰る場合： JAC3748 屋久島 13:50 発 鹿児島 14:25 着

JAC3750 屋久島 15:15 発 鹿児島 15:45 着

高速艇で帰る場合： トッピー 84 屋久島(安房) 13:30 発 鹿児島 15:30 着

お願い：重要

・航空機、高速艇は各自で予約ください。

航空機：JAL ホームページ <http://www.jal.co.jp/>

鹿児島～種子島、鹿児島～屋久島の早割切符は2ヶ月以上前から予約できます。

座席数が少ないので早目の予約をお勧めします。

高速艇：トッピー 鹿児島商船(株) <http://www.topyy.jp/>

予約センター TEL：099-226-0128

ロケット コスモライン <http://www.cosmoline.jp/>

予約センター TEL：099-223-1011

鹿児島～種子島 片道 ¥6,500.- 往復 ¥11,600.- (同一船社の場合)

種子島～屋久島 片道 ¥3,500.- 屋久島～鹿児島 片道 ¥7,100.-

鹿児島 種子島 屋久島 鹿児島 のラウンド予約も可能です。

・宇宙センター特別見学申請のため4月13日(水)までに各自の身分証明書(運転免許証あるいはパスポートのコピー)を下記幹事まで提出願います。

参加申し込み方法：

京機会ホームページ <http://www.keikikai.jp/shibu/kyusyu/H23haru.html> よりお申し込み願います。

申し込み期限：4月13日(水)

種子島への到着便、帰る便、オプション参加の有無を明記ください。

幹事： 京機会九州支部 顧問 藤川 卓爾(S42)

第二回 旧島進研究室・小寺秀俊研究室合同同窓会・研究報告会 開催のご案内

第一回合同同窓会から約3年の時が流れ、この度第二回合同同窓会の開催を企画いたしました。ご卒業・ご修了された方々、さらに2つの研究室の研究生・研究員そして教職員の方々のご参加を心よりお待ちしております。

日時 平成23年3月20日(日曜日)13時～

《研究報告会会場》 京都大学 工学部物理系校舎(216号室) 吉田キャンパス

《ポスターセッション会場》 工学部物理系校舎(214・215号室) 吉田キャンパス

《交流会会場》 聖護院御殿荘

プログラム(発表順等調整中)

13:00 開会の辞(京都大学) 小寺秀俊

13:10 研究室の沿革と現状 京都大学准教授 神野伊策、 助教 横川隆司

13:50 九州大学 准教授 津守不二夫

14:30 首都大学東京 教授 楊明

15:10 香川大学 准教授 鈴木孝明・

15:40 大阪大学 助教 新宅博文

16:10 休憩・ポスターセッション(小寺研究室)

17:00 低炭素ナノファブリケーションハブ見学(+小寺研究室・関係施設)

18:00 交流会 * 20:00 終了予定です。

お申込み等の詳細につきましては、下記小寺研HPサイト【同窓会情報】にて、ご確認のほどお願い申し上げます。 <http://www.ksys.me.kyoto-u.ac.jp/>

幹事 小寺 秀俊(代表)、 楊明、 鈴木 孝明、 山本 英郎

問合せ先: ご不明な点、ご質問など、何なりと寺川までご連絡のほどお願い申し上げます。(e-mail: k.terakawa@ky3.ecs.kyoto-u.ac.jp)

1 . 2011 年 日本経済再生の鍵は何か ~ 問われる国民一人ひとりの覚悟 ~
 みずほリサーチ (2011 年 1 月号)

<http://www.mizuho-ri.co.jp/research/economics/pdf/research/r110101.pdf>

<http://www.mizuho-ri.co.jp/research/economics/pdf/research/r110101point.pdf>

アジア動向： 中間層を核に拡大する ASEAN 消費市場

~ 今後の耐久財普及過程には国ごとの違いも ~

<http://www.mizuho-ri.co.jp/research/economics/pdf/research/r110101asia.pdf>

中国動向： 中国のインフレと金融政策

~ 一段の引き締めは景気動向に配慮しつつ慎重に ~

<http://www.mizuho-ri.co.jp/research/economics/pdf/research/r110101china.pdf>

日本経済： 当面の個人消費の動向

~ 政策効果の剥落で低迷が長期化するリスクも

<http://www.mizuho-ri.co.jp/research/economics/pdf/research/r110101japan.pdf>

政策動向： 2011 年度の導入が予定される「求職者支援制度」

~ 就労を支えるセーフティネットの構築に向けた課題 ~

<http://www.mizuho-ri.co.jp/research/economics/pdf/research/r110101policy.pdf>

海外通信： 止まらない英国の物価上昇

<http://www.mizuho-ri.co.jp/research/economics/pdf/research/r110101foreign.pdf>

日本国内投資促進プログラム

<http://www.mizuho-ri.co.jp/research/economics/pdf/research/r110101keyword.pdf>

2 . これからの消費市場を読む - 拡大する世界の中間層を狙え

<http://www.jetro.go.jp/world/asia/cn/reports/07000438>

(2011 年 1 月) J E T R O 日本貿易振興機構

要旨： 世界の消費市場は、金融危機の影響を受け若干縮小したものの、新興国では可処分所得が急速に上昇するなど、消費市場は拡大傾向にあり、日本企業の新たなマーケットとして期待出来る。新興国の消費市場の特徴を解説し、アジアではどんな物・サービスが売れていて、日本企業の商機はどこにあるのかを探る。

1. アジアを中心とする新興国が牽引する世界経済
2. 世界の消費市場
3. 年齢と所得水準で見た各国の消費構造
4. 海外で収益拡大を図る日本企業
5. 加速化が求められる小売業の海外展開
6. 日本製品は高いブランドイメージを確立

7. グローバル市場を取り込むビジネスモデルとは何か
8. 拡大する新興国の中間所得層
9. 新興国の消費市場の特長
10. 所得が上昇するアジアと消費市場の拡大
11. アジアの売れ筋商品
12. アジア新興国のサービス産業に大きな商機が眠る

<http://www.jetro.go.jp/jfile/report/07000438/shohi%20shijo%20201101.pdf>

http://www.jetro.go.jp/jfile/report/07000438/uppermiddle_%20201101.pdf

3. 上海・北京ボリュームゾーン（一般大衆）消費者調査分析結果報告

2010.12.6

三菱UFJリサーチ&コンサル

<http://www.murc.jp/report/press/101206.pdf>

4. 「第12次5ヵ年計画と今後の中国経済」

財務総合政策研究所中国研究会

平成23年第1回

<http://www.mof.go.jp/jouhou/soken/kouryu/kou09.htm>

資料1 「中国共産党第12次5ヵ年計画建議のポイント」

http://www.mof.go.jp/jouhou/soken/kouryu/h22/22_01a.pdf

資料2 「中国経済の最近の動向」 [699kb,PDF]

http://www.mof.go.jp/jouhou/soken/kouryu/h22/22_01b.pdf

5. 技術力で世界トップを猛追する中国

富士通総研

金堅敏

2011年1月

<http://jp.fujitsu.com/group/fri/report/china-research/topics/2011/no-144.html>

【要旨】

1. 世界スーパーコンピュータ技術、高速鉄道技術、国際主要科学技術論文などの分野で中国の科学技術力が急速に台頭してきている。しかし、要素技術、キーデバイスの欠如や技術論文の引用率の低さから中国の技術力に対する評価が分かれる。また、政府主導の自主革新政策についても失敗例が多く経済発展と同じように技術革新分野でも台頭するのかと疑問する声も聞かれる。
2. しかし、「コピー天国」という汚名の返上や低コストの優位性による経済成長の限界の克服を急がせ、技術革新志向の国づくりに向けて戦略転換を図ることは明らかである。R&D支出の年平均成長率は23%に達し世界有数の支出国になったこと、R&D支出額の70%以上が企業によるもので企業主体のイノベーションシステムが出来上がっていること、R&D要員数が世界最大規模になっていること、などから中国による世界技術革新への貢献は期待できる。

6. No.155 中国内陸部の経済成長と日系企業の展開

日本政策投資銀行

http://www.dbj.jp/ja/topics/report/2010/files/0000006093_file3.pdf

中国の沿海部先進地域とその他地域には厳然とした経済格差が存在するが、内陸部にも所得水準の高い都市はいくつも存在する。また、金融危機後は沿海部に比べむしろ内陸部の成長率の方が高く、存在感を増している。フロンティアとしての中国内陸部に注目し、日系企業の展開を概観する。

7. グローバル化と中国の経済成長

経済産業研究所

2011年1月

RIETI Policy Discussion Paper Series 11-P-002

<http://www.rieti.go.jp/jp/publications/pdp/11p002.pdf>

要旨： 近年、目覚ましい経済発展を遂げた中国は、世界経済に占める比重が高まり、日本との経済的な結びつきは急速に強まっている。日本の今後の成長を占う上でも中国の経済成長の持続可能性は重要な論点であり、そのメカニズムの解明は政策担当者と研究者から大きな関心を集めている。こうした観点から経済産業研究所は中国国務院発展研究中心と協力し、中国企業の国際化と経済成長の関係について企業データを活用した実証分析を行う共同研究プロジェクトを設置した。本稿ではこの中間的な成果と今後の研究課題を簡潔に紹介する。企業の国際化は、対内直接投資を通じた外資企業の活動が促進することと、中国企業自らの輸出や対外直接投資による海外市場への参入が想定される。

第一に、我々は中国の産業活動に重要な比重を占める外資企業の活動が国内産業に成長にもたらす影響を検証した。その結果、外資企業の生産活動が国内産業の生産性を向上させていること、外資企業のR&D活動が国内企業のイノベーションを促進していることが示された。ただし実証結果は、その影響が外資企業の所有形態（独資か合弁）や出資元（香港・マカオ・台湾系かその他）あるいは活動する産業（同一産業か川下・川上産業）によって異なることなど、影響の経路が複雑であることを示している。第二に、中国の輸出は一部のもっとも輸出額の大きい企業にその多くが集中していること、こうした輸出企業は国内企業に対して規模が大きく高い生産性と資本集約度を有していることが確認された。今後の研究課題として、中国企業の国際化と成長の因果関係をより精緻な分析により解明することが、中国企業の成長の持続性を評価する鍵となるだろう。

8. 2011年の中国経済を占う 五輪と万博の後遺症の影響と展望

JBIC 中国レポート2010年12月号 富士通総研経研 柯 隆

日本政策金融公庫、国際協力銀行（JBIC）

http://www.jbic.go.jp/ja/report/reference/2010-041/jbic_RRJ_2010041.pdf

9. 新興国の成長性とドライバー

ニッセイ基礎研究所

http://www.nli-research.co.jp/report/econo_letter/2010/we101224aj.html

http://www.nli-research.co.jp/report/econo_letter/2010/we101224aj.pdf

要旨： ここ数年、新興国経済は目覚しく発展し、先進国の成長が停滞する中で両

者の差は縮小、新興国は益々存在感を高めている（図表-1）。本稿では、急成長を続ける新興国経済の今後を探るため、各種統計を用いた国際比較により成長性分析を試みた。分析のフレームワークとしては、名目GDP規模（2010年予測、国際ドルベース）で世界50位以内の国を抽出し母集団とした。先進国と新興国の区分については、(1)OECD加盟、(2)国際通貨基金（IMF）での定義、(3)株式市場の視点からMSCIでのWORLDへの採用、以上3点を全て満たす国を先進国、それ以外は発展途上にあると考えて新興国とした。新興国は地域別に、アジア、アフリカ、中南米、中東欧（含むCIS等）の4つに区分、アジアは発展度が2極化しているためNIEsとその他に区分、合計6つに分類している。新興国の多くは、一人当たりGDPのレベルが低く、インフラ整備も遅れており、今後の発展余地は大きい。しかし、発展余地が大きくても発展途上で停滞する国も多い。そこで、発展の実現性をみるため、(1)人口、(2)労働人口、(3)その他（都市化、研究開発、インフラ整備）の観点から、成長ドライバーの強度を探ってみた。結果としては、ブラジル、ロシア、インド、中国の主要新興国を比較すると、発展余地に大きな差はないが、成長ドライバーはインド、中国、ブラジル、ロシアの順番となった。

10．中所得国のワナに直面するマレーシア

アジアマンスリー 2011年1月号 日本総研環太平洋戦略研究センター

<http://www.jri.co.jp/file/report/asia/pdf/5304.pdf>

<http://www.jri.co.jp/page.jsp?id=19070>

近年、新興国の経済成長の持続性について「中所得国のワナ」が議論され始めている。とくにマレーシア政府の危機感は強く、すでにそれに対応した経済改革を発表しているが、実施に向けた課題は多い。

途上国への資本フローの変化とアジア諸国の対応

<http://www.jri.co.jp/page.jsp?id=19071>

アジア諸国への資本フローが急速に拡大しているが、資本取引規制はこれに対処する一つの方法となる。また、国内金融資本市場の整備がきわめて重要な課題である。

11．中印 ICT 戦略と産業市場の比較研究

富士通総研

金 堅敏

<http://jp.fujitsu.com/group/fri/report/research/2011/report-364.html>

<http://jp.fujitsu.com/group/fri/downloads/report/research/2011/no364.pdf>

要旨： インドは、1990年初期の自由化政策を推進し、ソフト産業政策と、欧米企業のグローバル化に伴うオフショアリングのニーズとがうまくかみ合って功を奏した。輸出で成功したインド ICT 戦略は、ハード製品産業の育成や国内情報化の推進、知的財産権戦略などへシフトしている。一方、ソフト育成や輸出に関する主要政策がインドより10年も遅れた中国は、輸出よりも国内ソフト産業の育成や情報化推進を図り、情報化と工業化の融合による新型工業化を実現しようとしている。最近で

は輸出構造調整の意味でソフト・サービスの輸出戦略もとり始めている。

通信サービス分野では、中印両国とも国有独占の事業形態から出発したが、インドでは多数の民間資本を中心に激しい競争が展開され、価格低下により加入者が急増している。他方、中国は国有資本を中心に3社体制を取っている。ただし、高付加価値分野では民間資本が数多く参入しており、世界的にも有名な企業が出てきている。

インドの携帯電話トップであるBharti Airtel社は、国内外での積極的な展開により加入者数で世界第6位に上っている。インドの社会・経済環境にフィットしたビジネスモデルを構築し、高成長性に止まらず、高い収益性と労働生産性も実現されている。ただし、低コストモデルにだけ依存する側面もある。世界トップの加入者を誇る中国移动通信は、高い収益力を維持しているが、労働生産性はBharti Airtel社の半分以下である。また、中国移动通信の戦略の中心は、普及が加速している農村部での低価格モデルを推進するとともに、データ通信や3Gサービスなどを通じた国内市場での深耕にある。

日本企業は、高付加価値化が進行している中印両国のICT市場に果敢に挑戦し、中印キャリアの低コストモデルを学び、成長が見込まれる新興市場で切り込むべきであろう。また、通信サービス業に止まらず、通信設備企業も同じような戦略で取り組むべきである。

12. インドにおけるM&A/JVの現状とその規制内容

JETRO日本貿易振興機構（2010年3月）

<http://www.jetro.go.jp/world/asia/reports/07000432>

要旨： インド市場に参入する際、独資100%で進出する方法もあるが、現地の既存企業の力を借りながら合併あるいはM & Aによって現地法人を設立するのも選択肢の一つである。その際、どのような点に留意したらよいか、外資規制との関係は、税法上の扱いはどうなるか、資本構成は、外国会社への送金は、などいくつかのポイントについてまとめた資料である。

この調査レポートは、KPMG Indiaに依頼して作成したものです。

「インドにおけるM&A/JVの現状とその規制内容」(1315KB)

http://www.jetro.go.jp/jfile/report/07000432/india_m-a%20final.pdf

13. グローバル時代のM & A

日本証券経済研究所 恩地祥光

拡大するクロスボーダーM & A市場と留意すべき取締役の義務

<http://www.jsri.or.jp/web/publish/review/pdf/5012/01.pdf>

今回の「資本市場を考える会」では、株式会社レコフの代表取締役社長の恩地祥光氏から、「グローバル時代のM & A 拡大するクロスボーダーM & A市場と留意すべき取締役の義務」と題してお話を伺いました。我が国におけるM & Aの提

案・アドバイスを専門とする先駆的な創業から 20 年余の歳月を経て、株式会社レコフは、その豊富なデータに基づく分析と的確な提案・アドバイス業務の遂行において、常に業界のトップランナーの位置を確保してこられました。近年では、国内の企業間の M & A に加えて、海外企業との M & A にも積極的に取り組んでおられます。

恩地社長からは、こうしたクロスボーダー M & A 市場の動向について、これまでの経緯、現状及び今後の展望について、明快で分かりやすい解説をしていただきました。また、ここ数年世間の耳目を集めるようになった M & A にかからむ「取締役の善管注意義務違反」などの各種の株主等からの訴訟事件を踏まえて、取締役は M & A を推進するに当たって、どのような点に留意すべきかについて具体的に分析していただくとともに示唆に富んだお話を聞かせていただきました。

14 . 製品アーキテクチャのモジュール化の進展のもとにおける日本、韓国、中国の東アジア地域における比較優位構造とその変化について 経済産業研 桑原 哲

<http://www.rieti.go.jp/jp/publications/dp/11j001.pdf>

要旨： 東アジア地域では発展段階の異なる日本、韓国、中国が主たる経済主体であり、経済のグローバル化を通じてリンケージを急速に深めてきている。こうしたなかでこれらの3カ国の分業構造がどのような要因で決定されているかを考えることは大きな意味がある。本稿では製品アーキテクチャに着目し、モジュール化のレベルと3国の相互の比較優位が一定の相関を持つことを実証した。また、中国の比較優位構造の変化が相対的に韓国により大きな影響を与えてきたと考えられることも明らかにした。

15 . アジア諸国における高度外国人材の就職意識と活用実態に関する調査報告

<http://www.jil.go.jp/institute/chosa/2010/10-080.htm>

雇用・能力開発機構 平成 22 年 12 月 22 日

概要： 研究の目的と方法日本企業はアジア諸国の高度人材とその予備軍から就職先として選ばれる存在となっているのかとの観点から、中国（北京大連）及びベトナムの有名大学大学院の学生、シンガポール及び韓国で高度外国人材として働いている者を対象に聞き取り調査を実施。

主な事実発見：

< 中国（北京大連）ベトナムの高度人材予備軍たる学生の「職業観」「就職観」>
北京の有名大学院の学生のほとんどは「専門を活かしたい」との職業観を持ちつつ、就職先は「雇用の安定」を重視して選択する堅実派が多かった。先進国に対する関心は高いものの、日本を含めた「外国にある外国企業」への就職は現実的なことと捉えられていない。

日本語で機械工学を学ぶ大連の学生の場合には、日本企業に対する関心は高いも

の、日本企業への就職は「経験を積む」「技術を習得する」機会と捉え、長く日本で働くことを念頭に置いていない者が多かった。

ベトナムの有名大学の学生は、就職先について「賃金が高い」「専門知識を活かす」ことを理由にベトナム国内の日系を含む外資系企業を希望する割合は高いものの、外国における就職への関心は低かった。また、日本語を学ぶ学生については「経験を積む」目的で日本で就職することはあり得るが、長く勤めることはまで考えていなかった。

<高度人材としてシンガポール、韓国で働く外国人の意識>

シンガポールで働く高度外国人材は、長く勤め、社会に根を下ろして暮らしている者が多かった。理由は、多民族社会、整備された企業の人事制度、英語の普及、住宅などの社会インフラが整っていることなどによる。ただ、高度外国人材の多くは近隣諸国出身の中国語を解する中国系の者が多い。

韓国で働く高度外国人材は「韓国語の習得」が就職先、日常生活で求められ、「言葉の壁」に遭遇する割合が高く、現状では韓国企業に定着して長く勤務することを指向している者は少なかった。高度外国人材の多くは、韓国の大学院に留学し、修了後、「経験を積む」ために数年韓国企業で働き、帰国している。

政策的含意

わが国の高度人材に対する入国管理制度は、他の先進国と比べても開放的であるにもかかわらず、実際には企業における高度外国人材の受け入れは必ずしも大きく進展しているとは言い難い。上記の事情を踏まえて、厚生労働省の要請により、日本企業はアジア諸国の高度人材およびその予備軍から就職先として選ばれる存在となっているのかとの観点から、日本における高度外国人材の活用を促進するための基礎データの収集を目的に、ヒヤリング調査を実施した。

政策への貢献

日本の高度外国人材受け入れに関する厚生労働省における総合政策の企画立案に貢献したと考える。

本文

<http://www.jil.go.jp/institute/chosa/2010/documents/080.pdf>

序章 調査の目的と概要

http://www.jil.go.jp/institute/chosa/2010/documents/080_00.pdf

第1章 調査結果の概要

第2章 中国における調査結果

第3章 ベトナムにおける調査結果

http://www.jil.go.jp/institute/chosa/2010/documents/080_01.pdf

第4章 シンガポールにおける調査結果

第5章 韓国における調査結果

【資料】質問項目

http://www.jil.go.jp/institute/chosa/2010/documents/080_02.pdf